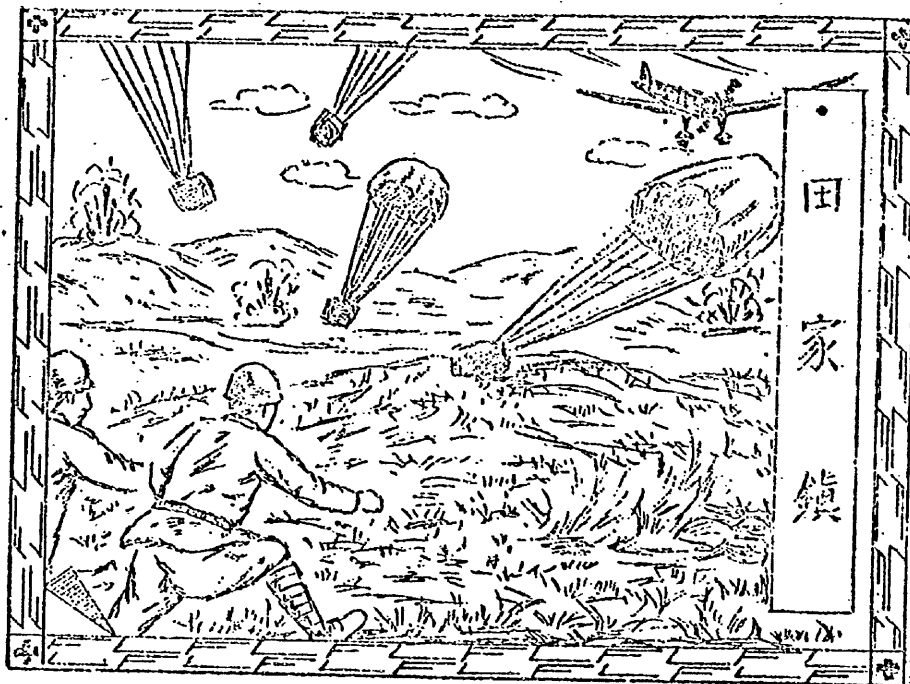




目次	
野戦病院	
田家鎮附近の戦闘	第二野病 留置所 中野荒太
折角の鶏の丸焼も捨て	第二野病 留置所 山崎賢雄
魯國の田家鎮戰病院	第二野病 留置所 山口三月
美は主従の情愛	第二野病 留置所 迫田千俊
あゝ友軍機の投下だ	第二野病 留置所 池林仁太郎
敵軍更に悪役を演じる	第二野病 留置所 迫田千俊

田家鎮附近の戦闘

九月十五日より十月五日迄

第一野戦

軍医少佐 中野 虎太

田家鎮攻略戦開始に當つて 之に属した
第一野戦病院長は 先づ廣済の第六師團司
令部と支隊司令部に行つて 關係方面と業
務上の打合せをしたり 指示を受けたりし
たのであります
そこで

「此の戦闘はたいした事はない 先づ予想
傷者は百名位かな 此の百名の傷者を収
容治療して、輸送は衛生隊担架中隊の手
で前送する 田家鎮は二日間位で陥ち
予定であるから 百名を二日間前送し
揚子江上にある海軍に引渡して 水路九
江方面へ下げるか 又は江上陸軍輸送船
にて後送せよ」

との指示でありましたので 大体傷者数と
後送のことは見當がついたのであります
それから支隊司令部では
「馬は極力減少してくれ 車輛の通る道は
無いから すべて駄馬編成で 縦長を力
めて短縮する爲には 諸材料は各隊とも
必要最小限度に止めよ」
と云ふ御趣旨であります
即ち 群がる敵の中を分け入り 後方應
濟との連絡も無くなるからです

FL 田家 /

0465

103

その方針の下に 病院長は各医官と討議研究を重ねまして 大体戦闘期間と其の豫想傷者とを考慮に入れ 司令官や軍医部長の意圖に合致する様に企圖して 裝備を完成しました

即ち駄馬は衛生材料七頭 糧秣十二頭 患者毛布被服類五頭 彈藥二頭 豫備馬四頭 乗馬七頭であります

衛生材料中の「リリングル」氏液の如きは 衛生兵の背囊に出来る限りつけて行き 又若干のリユウサックには「ガーゼ」類 繻帶材料も入れて運ぶ事にしたのであります 器械類の如きも 総て必要のもの、みを医板から取り出して出来る限り容積を小さく梱包して 内容を充實する如く裝備整齊せしめました

群がり敵中に突入して行く戦闘でありますから 病院も自衛の為に小銃五挺と捕獲

「チエック」機関銃四挺が渡されたので一同士氣旺盛 勇躍戦闘部隊に随従して九月十五日 廣済を出発して 回家嶺に向か前進したのであります

今村支隊長は 第一野戦病院は大てい畧駝山が取れてから開設する様になるであらうと言つて居られました

然るに九月十六日は松山の攻壘の為に生じた傷者數十名を 吳灣附近の衛生隊で既に收容してゐると言ふ事を聞きました 間もなく支隊長より 吳灣南方衛生隊に收容中の傷病者約七十名を 第一野戦病院の一部を前進させて引継げ と云ふ命令を受けましたので 直に酒井大尉に第二半部を指揮せしめ 十六日午後四時頃 鉄石嶺と云ふ所を生発前進せました

酒井大尉の第二半部が 吳灣を過ぎる頃突然右側の高地に百余の敵が現れて 頻り

に側射をやり出したので、酒井大尉指揮の下に、衛生兵は直に之と應戦して、激しい戦闘が開始されたのです。大尉の指揮が非常に巧みで、地物を利用し、チエツクを以て敵に近接して、啗ってうって、啗まくり、とうとう敵の左側背に出で、敵を退却せしめました。

然し夕闇となつて、どうしても呉灣南方山袋の衛生隊との連絡がつかない。敵は又出てくる。暗夜地形も分らず、前進も連絡も出来ない。で、連絡兵が此の状況を報告に、戻つて来ました。で、鉄石嶽に在る司令官に、此の状況を報告して、指示を仰いだのであります。

司令官は、然らば一應安全地点に下り、暗板を見て前進せよ、との事でありました。其の後、間もなく、病院は明早朝、此の鉄石嶽で開設せよ。

其の傷者に充分なる治療を絶せば、開戦直頃迄には、廣済から衛生隊の主力が来て、廣済へ後送する。との事であり、これは支隊と師團司令部との連絡で決定したのであります。酒井大尉の指揮する第二半部は、夜十一時頃、鉄石嶽に引揚げました。

命令の如く、十七日の早朝から、鉄石嶽の民衆内に病院を開設して、傷者を收容し、各張切つて、分担任務を遂行し、忙しの中に、先に向、若者部、治療部、病室、経理、給興等、業務を整然として、片付け、豫定の通りに廣済から前進して来た衛生隊担架中隊に引渡すことが出来ました。

僅か七十名ではあります。各病床目録を作成し、治療を完全にし、食糧を與へ、薬物を與へるなど、極めて短時間に診療を

完成したのであります。

此の第一回の砲撃訓練では相當の絹帶材料を使用したので、材料が如何にならうか、少し先のことが氣にならう様になりました。

九月十七日は戦場部隊第一線が松山口を占領してずん／＼前進したので、病院は松山口北側山麓に設けましたが、十八日の拂曉からポツリ／＼と雨になり、秋の雨山の雨。

細雨蕭々として

来り 却々晴れさうもない

難路松山口を越えて、泥と血に染める幾十の隊、砲を撃み越して、三面圍に到着したのが、午後四時頃でした。

此の時分の方から、敵砲弾が連続的に落下しては炸裂する。

自分等は小さい藁葺の煉瓦小屋に雨を凌いで一息を叩かしました。前方では戦場面、銃砲声が引つきりなしに聞える。雨に濡れた友軍死傷者のことを思ふと、早く行つて援助してやりたい心で一杯です。夜に入り雨が頻りに降る。激しい雨です。山麓一帯は暗雲低く、霧深く、これでは友軍の飛行機も協力出来ず、困つたやうであると、好ましからぬ豫感したのであります。

九月十九日朝 支隊長から

「第一野戦病院は庄屋附近に前進して、病院ヲ開設スベシ」

と云ふ命令が下つた。

この日も朝から雨。自分は酒井大尉以下十名計り率いて、先づ開設位置を選定する為、園上の庄屋に向つて前進しましたが、途中は敵砲がピュン／＼と飛来する。

0468

やつと小農家が三軒計りある所に到着した
か、それが庄屋のす。此では狭いと思ひま
した。此の庄屋一線はすぐ前の烏龜山と
沙手懸高地の間に段々中であり、第一線

散兵線も眼の前

であり、左翼第一大隊副官は、すぐ其所の
凹地にあつて

「院長殿、其所は危い、敵弾が澤山来ます
から、もつと後でないと駄目です。」
と言ふのです

庄屋は此の時、歩兵第一線から約三百米
しか離れてゐなかつたが、附近には全く家
がない。二軒も下ると一部落があるが、然
し之は命令の地とではない

暫く討還を待したが、張鳳林にも衛生隊
がは入つて居る。外に適當の家屋や部落が
ないのみならず、衛生隊の担架中隊からは

血に塗れた重傷者をどしどし運送して来て
開設をせまつて、病院に早く收容してくれ
と大声を發してゐるといふ状態でした

自分は考へました。此の地点は第二線間
近であり、山砲陣地とは隣りて居る。水も
近くはない。敵弾は引つきり無しに来ます

然し探しても、他に適當な部落も家も實
際無いのである。雨は續りに降る。血塗れ

の傷者を乗せた泥の担架の一隊、彈丸の
来る泥濘の中に、悄然として立つてゐる

そこで決心した。自分は即刻此の小農家に
開設命令を發して、濡れた血塗の傷者を收
容することにし、二面圍衛隊部隊に急進を
命じ、全員到着迄に開設しました

即農家の中を片附けて、附近から藁を運
んで来て、其の上に毛布を張べたのが病床
です。病院が出来たのであります。遺憾
なく此の家は暗い貧乏百姓家で、雨が漏る

のには困りました

速かに傷者を收容して各部の活動が始まり、武器装具を受取り、金銭貴重品を保管したり、手術をしたり、創の處置をしたり、病床日誌を作ったり、各部各部が病院本来の活動を開始して、傷者の治療を始めたが、翌朝になつても、陰雲低く垂れて何時晴るべくもありません

又此の戦場が何時まで続くやも知れず、傷者は続出する。雨に濡れた血と泥の重症者が続々と運ばれて来る。忽にして三〇—五〇—七〇と運ばれて来たので、間もなく狭隘な病院が、傷病者で一杯になつてしまつた。將校病室だけは一つ別にしてあつたが、一般兵も入れねばならぬ破目になつてしまつたのであります

重症者が割くない。殊に今度の戦は、小銃創もあるが、砲彈創と手榴弾創も割くな

敵の砲が多いのと、肉弾戦が多いことを物語つております

傷者の手術をしてやり、手當が終り

一杯の温かいミルク

を與へると、もう彈の音も、負傷の事も何も彼も全く忘れた様に、どの傷者もどの傷者も、只もうグウ／＼深い眠に陥るのであるが、中には頭部首管銃創や胸腹部の大きな傷者や、上肢下肢の大きな砲彈創など受けた患者の中には、知らず識らず、無意識に「ウーン／＼」と呻声が何処となく漏れて来る

軍医も衛生兵も不眠不休、次から次に傷者の手當を行ひつゝ廻つてゐる

夜間の激火は絶対に禁止の命令である。ローソクの火は絶対に外に滅してはならぬ。敵の砲の狙ふところである。火が滅れ

ると無茶裏ちに書つて来るので 夜の火は
司令官から厳禁されたが 燭火なしでは
我々の仕事は出来ない 手當も繃帯も出来
ないので 慎重に各室の隙間に藁を詰めて
夜通し傷者の処置をしました

敵は

夕方になると砲撃

して来る 張風林や庄屋附近一帯には 各
隊の大小行李や衛生隊等の後方部隊が 點
點と散在してゐます 夕方になると此處を
片端からドカン（書つて来ます 次から
次にやつてくる

ッピユーン ドカーン

前の馬口湖の方からも 後の香山の方から
も来る 病院の前や横に すぐ近くに落下
するが 却々病院に命中しない

そのうちに右翼に偏して次第に遠くなつ

たり 左翼の方に偏して遠くなつたりする
「シユーン ドスン」
と音がするのは不発弾らしい それが一発
に一発 五発に一発の割合であります

x x x

九月二十日からは繃帯材料もなくなつて
来ました 糧秣も無くなつた

小さい創は一日や二日は見なくともよい
が 大きい創になると 毎日繃帯交換をせ
ねとすぐ蛆が湧く 繃帯の下から 白い小
さい蛆蟲がぞくぞく這出してくる 如何に
消毒してあつても 之が又不思議な様になつ
の間にか出て来る 蠅も沢山居る

敷載に制限があり 豫想傷者の指示もあ
り 後方からの補給は全くつかないので困
つてしまった

病室を廻ると 軍医殿繃帯を換えて下さ
い 臭くてたまりません と訴へる それ

FL 田 4

0471 119

でも よし暫く待つてくれ と答へる外致方が無い

師團にも急電を以て頻りに補給を催促してあるが 師團としても迅速な補給の方法が無いらしい

全般的に見て 此の時は前方田家鎮方面も 後方松山口方面も 多数の頑敵を制圧する為に 友軍も集つて 奥を盡し

大切な弾薬も不足してゐるし 糧食も残り少なくなつて居る 繃帯材料位の如きは

先づ問題でないらしいのでした

庄屋には傷者が充満して 最早收容の餘力は全然無くなつて 若干輕傷者は仕方なしに手當をして 軒下に置いて雨を凌がせたのです

九月二十一日は 張鳳林(庄屋)西南方一軒の衛生隊に收容してゐる傷者二七〇名

を引き継ぐべく開設命令を受けましたが 朝から繃帯材料が缺乏してゐたので 實際困難を蒙つて居ました

今日は雨は止んだが 曇つて晴れない

午後四時頃 友軍機が十機ばかり編隊で張鳳林上空にやつて来た 其の内一二機が何か頻りに探し求めてゐる様な気がしましたので

病院の位置を探してゐるのではないかと第六感が働いたので 自分はずい頭や手を負傷した輕症独歩患者を多数屋外に出して 白布を振つて 機上の操縦者に連絡をとつてみました

果せる哉 其の内の二機が自分達の上空を円形に次第に低空飛行に移つて来たと思ふと すぐ附近の右方丘上に

落下傘の附いた梱包

を十梱ばかり投下してくれました

占めたが、材料だと直感しました

果せる故、又は衛生材料、昇永がいせ、三角巾、其の他の繃帯材料、血清類、藥物等でした

救いの神の様な気がしました

凡そ吾等衛生部員に繃帯材料が無くなったことは、歩兵が彈丸を打ち盡したよりも尚悲しい思ひ出です。傷者に対して手の施し様がない。然るに只今此の衛生材料十梱の空輸投下は、確かに蘇生の思ひであります。飛行機に感謝し、思はず合掌したのであります。いや、日本と云ふ大きな力に感謝したのです。

名譽の傷者の血に染む創部を速かに繃帯交換をしてやると大喜びです

次は糧食が足りない。病院の將兵は食ひ延ばしをしてゐるが、傷者には何とかして

一日三度は食べてしてやらねばならぬ。ルウ、葡萄酒も余り残つてゐないので、附近の茅畑から茅を掘って、茅粥を作つて食べさせたりして飢を凌いだのです。

庄屋 張風林には傷者が充満して居り、下玉に前進した。

衛生隊にも傷者は充満

してゐる。最早各隊の繃帯所も衛生隊も病院もすべて傷者を満喫して動きはとれません。さりとて、名譽の傷者を雨に晒す訳にも行かず、〇〇支隊長も司令官も困窮の色が見えました。

それに十九日以来、支隊は後、松山口、香山、陶岩方面に執拗に頑敵を受け、前には、田家鎮方面よりと馬口湖方面から包圍せられた形であり、北西南の三方から砲弾や小銃弾が雨の様に来るので、正に彈雨

下の野戦病院となり 病院の馬が四五頭や
られました

敵小銃弾は晝夜を分たす屋根瓦に當り
或はフスリ／＼壁を貫くのです

傷者は充滿したが 傷者を後送する方法
がない 出祭前の師團の指示は何にもなら
ない 夜は暗黒であるが 暗黒の中を担架
隊が傷者を運搬して来る

前述の通り 火の洩れろのを防ぐ／＼
若心慘腔 辛うじて負傷兵の手當や 手術
をするのですが 火が洩れると粗糲をする

多数の傷者であつた為に 繃帶材料も

飛行板投下のみでは足りる筈もない 傷者
が続出するし 前方沙子塵方面からも 後
方松山口 陶器方面からも 傷者は続々血
と泥に塗れて 担架に載せられて来る 雨
漏り家の軒下に迄收容せねばならぬ状況と
なつてしまひました

然るに 幸にも九月二十三日 庄屋東方
三軒 黄泥湖畔舟着場平山に 軍からの連
絡として 独工の鉄舟が僕等かた／＼やっ
て来たのです

そこで明早朝から 傷者を揚子江上に
し 江上待機の

病院船に水路輸送

が出来ることが判りました 之は軍からの
配慮です 之が又非常に傷者後送に光明を
與へたもので 此処にも感謝の念が湧いて
来ました

そこで平山舟着場附近の農家数軒に患者
集合所を設けて 輸送に堪ふるものをどし
どし運ぶ事が出来 二十四日の早朝は晴大
で 患者後送にはもつて来いの目でした
糧秣 彈藥を積んで来た工兵の舟で 歸り
は患者をのせて帰つてくれる 全く以て有

難い思ひでありました

敵軍が 武穴の下流六料の堤防を決潰した為、揚子江の水流が黄泥湖に流れ込んで、湖水が氾濫して、高い村は島となつてしまつたのです。工兵の機舟は此の決潰口から入つて来たのです。

それからといふものは、毎日百五十名二百名と云ふ風に水路後送が出来たので、ほつと一息つく事が出来ました。

傷者は後送しても又やつて来る、収容する手當をする、後送する、慌しい業務の続行である。然し二十四日以来糧食は充分に未だか

衛生材料は益々不足

するばかりでした。軍艦安宅から願つて貰つたり、武穴豫備病院に連絡して貰つたりして不足を補ひ、或は九江に下士官を派遣

したりして、凡ゆる手段を講じて、衛生材料の補給を圖つてみましたが、概ね不足勝であり、殊に、五百枚用意した病床日誌は二十三日以来全く缺乏し、病床日誌の代りに、罪紙や通信紙を使用しましたが、之も遂に使い盡してしまつた。どの部隊にも同様に缺乏して居るし、病床日誌用紙は他の隊には全く持参してゐないし、困つたことでありました。

インキも無くなつた。人任りの民家から墨を徴発し、墨汁を作つて使用し、間に合はせたりしました。

X X X

砲弾が来る。九月二十四日午後三時頃、張風林の病院で、井上、田嶋、雨申尉が手術中に、隣室に「ドカン」と敵砲弾が落下、屋根を貫いて炸裂しました。此の室の傷者は後送のため、平山舟着場に、たつた今出

FL 田 6

0475

292

発した処であり、全く空になって猫一匹も居なかつたのです。僅かの遠ひで三四十名やられる処でした。之が全く天祐と云ふものであらう。神の加護を感謝したい。

夜に入ると

ポツカン・ポツカン

と聞き馴れぬ敵の銃声が絶え間無しに聞えてくる。自動小銃と云ふことです。

X X X

九月十九日夜、病院を開設して以来と云ふものは、何時敵襲があるかも知れない。傷者の処置が終れば、病室では患者十五名に一名位の衛生兵をつけて、他の衛生兵は悉く病院周囲の警戒線について敵を監視し、自衛防禦の戦いもやらねばならぬ。又軽症者にはすべて小銃を渡し、何時でも戦いの出来る姿勢にしておく。状況上致し方ないのであります。

夜間の燭火を減らす事は絶対禁上です。其の爲、衛生兵は、晝間、注射薬や注射器の置き処を一定しておいて、暗黒の病室でも上官の命令で、手探りをして、間違はぬ様注射をしたりしたが、次第に不便にも馴れて来たのです。

重症者の大便や小便を取つてやるには、水汲に土民が使ふ大瓢を二つに切つた様な大きな水匙子、杓や、小さい浅い桶の類が、一番應用が出来ました。罐詰の空罐は小便を取るのに大変便利でした。何分尿器尿器は全く携行が出来なかつたのです。

X X X

九月二十八日、沙子隘や、烏龜山から前の方には、二線、三線の鉄條網が多く、堅固にして、巧妙な敵の陣地があり、容易に突破することの困難なるを思はしめたが、夜が明けると、田家鎮に出る北側、玉屏山

麓の高い

岩壁の上に大きな日の丸

が翩翩として秋風にはためくのを見た時は嬉しくて／＼感謝の涙が流れました
もう田家鎮の陥落も間もないぞ

全日 風家塘に前進して病院を開設 此の部落民に吐瀉をしてゐる者があり 夜に入る 夜に入ると死体を家から持ち出すのを見たので「コレラ」に相違ないと調べたが果して「コレラ」に因る死亡です
それから 友軍に「コレラ」患者が出来て どのく 擔架で運ば込まれることになりました

一番困った事は「コレラ」患者に絶対必要な注射薬「リンゲル」氏液や食塩水が缺乏してゐる事です 暗い気持です 若干は武穴 九江から手に入れましたが 然し

「コレラ」患者は一人一日少くも四千及即「リンゲル」五百及入八本を要するのです
それに多くの強心剤も必要である

二十九日 三十日 十月一日 二日と漸次「コレラ」患者及疑似者が増加して遂に四十一名の多数に達しました

患者を救ふ為の「リンゲル」氏液は全く缺乏して 施す方法が無い 此位窮した事はない 天を仰いで長大息とは此のことでした

外科手術の爲の消毒薬も使ひ盡した 僅かに軍医携帶薬の中の昇汞錠の残りが幾つかあるばかり それを虎の子の様に大事にして「コレラ」患者を取扱った者の手の消毒をするのでした それも亦少くなり
防疫上大いに憂慮苦びしましたが 幸に至る嚴な防疫効を奏して 院内感染は勿論 他隊への傳播を絶無ならしめ歸任事は全く奇

蹟であると思ひます

「コレラ」患者に注射すべき「リンゲル氏液」が無いので、自分は決意して、山間の清水を汲み、下士官兵の持つてゐる携帶固形食塩を集めて、支那釜で煮沸し……

急造生理的食塩水

を作り、どしどし「コレラ」患者に皮下注射をしてやりました

斯くの如き治療法は、内地の人の考では想像もつかない乱暴な遣り方であり、非難の餘地もあらうと思ひますけれども、このまゝに放任すれば、空しく「コレラ」患者に手當を施さずして、多數を死なせるのみであります

それで私は、思ひ切つて急造生理的食塩水を約三斗作成させ、どしどし注射し、致命的に大なる効果を擧げることが出来まし

た

四五十名の患者中から、死したものは僅か六名であつて、他は悉く其の生命を救済し得たのであります。急造食塩水が如何に効果的であつたかを物語るものであり、又決して心配も後障礙も貽さるることを体驗いたしました

戦時では之も仕方が無い体驗であり、体驗が又窮した軍医の資本ともなり、之が本戦闘間「コレラ」患者の治療法として、急救的效果的の最も顯著な事例であつたと思ひます

x x x

九月三十日、午後舟便で多量の防疫材料が到着し、直に各隊に分配する。「コレラ」の發生した部隊も、發生しない部隊もすべて充分に消毒防疫を實施することが出来たので「コレラ」患者も激減しました

0478

次で十月三頃から、リッセル氏凍張心刺
ウタミに刺等の注射も逐次到着する様
なり 患者の爲にも大なる苦痛を省いたのであります

風家塘では病院の前に二反歩程の大きなクリークが
あり それに沢山の鱒や鯉や鯊の類が生かしてあり
ました。此の池では土民のコレラ患者の吐瀉物を洗
つたり流したりしてゐる 其の水がコレラ菌に汚染
されてゐて其の魚類は如何に危険であるか
は分りまゝておきです 尚此クリークの水は絶対使
つてはならぬと命令があつたに拘らず、隊の兵連は
矢張り網を曳いて魚を捕つたり 手榴弾で
浮ぶ魚を捕つて食つたりするのです

とうく 此の内何名かが罐かに「コレラ」
に罹り 其の内一名は遂に死の轉帰をとつ
た事實がある 上司の親切な御注意に反し
た天罰は觀面でした 其の後防疫部の検査
で 此の池の水に「コレラ」菌のあることを證明されました

九月二十九日午前七時、田家鎮攻略成功との支隊
の發表に將兵一同抱き合つて喜び 感謝に
満ちたのでした

此の戦闘間 病院開設六箇所 患者療養所六回
收容傷病者約一千五百名の多数に達しました
病院が多数の傷病者を擁して 彈雨下に戦
傷をしなから傷者の治療を施し 傷病者の
飽和状態になつた時 若し第一線が破られ
ば必ず全滅するものと覺悟はしました 殊に
我を包圍する十倍二十倍の頑敵の あの執
拗な反響を 孤立無援 寡少の兵力を以て
能く持ちこたえてくれ 陣地を死守し 遂
に難攻の堅壘を陥落してくれた数多の英靈
に対し 只、感謝の黙禱を捧げるのみであ
ります



折角の鶏の丸焼も捨てゝ

0:0:0:0:0:0:0:0:0:0:0:0

第一野病

衛生軍曹 山崎寅雄

九月十五日から 敵が難攻不落を誇る田
家鎮攻襲が始まりました
廣済を出てから三日目の黄昏時
部隊は 嶺南地に着きました

皆は思ひくゝに 何より楽しい夕飯の仕
度にかゝりました 皆四五人位づゝグループ
が出来てゐて 今業的に仕事が始まる
私達のグループは福丸 藤原 二人が炊
事係で 私に設営係です

先づ菓を見つけに行き、まだ叔のついてゐる稲を打落し、露營地に持つて来ました。そしてきれいに敷き、今迄餘り張つたこともない天幕を今日に限つて張り、さつぱりした座敷が出来上りました。他の組も大方出来たやうです。

もう炊事係は飲炊きに行つてから一時間
余にもなり 陽もはや没せんとしてゐるの
に 一向歸つて来ません

今迄にない此の立派な天幕座敷を一時
も早く見せてやりたので 迎ひに行かう
かと思ひましたか もう帰りさうなものだ
と ちつとして待つてど暮せど帰らぬ

其のうちに急に命令が変り、出發です。か
うなると内地の田植時よりもまだ大變で
す。炊事をしてゐる所は二町余もはなれた
丘の先です。呼べどよべど返事はありませ
ん

仕方無しに田圃を一目散につまづいて丘
に上つてみると、下の方に一寸した部落が
あります。息をはずませ乍ら

「福丸さん、藤田さん、出発ぢやつど」

何をしちよいやいけし

とわめくと、福丸君が慌て、両手にまだ

汁の出る飯盒を下けたまゝ、引込んだ眼玉
をキョロ／＼して

「なに、出発ぢやつちやし

と言ひながら丘に駆け上つて来ましたが

先生なか／＼の小心者で、心配の余り、も
う何も言はず走り出しました

藤田君はしばらくして、鶏の丸焼をぶら
さげて

「折角良の汁が出来たところを、惜しい事
ぢやなあし」

と言ひ乍ら上つて来ます。振り返つて見る
と福丸君は一所位前の田の中を、後をも見

ずき走つて行きます

早く帰つて装具を着けやうと二人共今来

た道を走り出しました。走り乍ら

「おはん遅や、ほんに暇が／＼たが、何を
しちつたけし

とさくと

「やかましや言やんな、後で詳しことは語
つてし

と言ひ乍ら宿舎に向ひました

宿舎の半町位手前に小さな溝がありまし

た。その溝の所に徳増君達の組が、此処ま

で汁の一杯入った鍋を持つて来たのを、と

う／＼置いて行つてしまひました。とても

美味しさうな香がする

「もう、その鶏もうち捨てやいし

「何故、持つて行くがし

「んにや、今頃そげな物持つて行くと、近

藤准殿にふてと油しぼらるつどし

すると惜しかり乍らも 到々思ひ切つて捨
てゝしまひました

露营地に帰ってみると もう皆が出発準備
をしてゐました

それから快々的天幕を着けて、汚れのつ
いた飯盒を洗ふ暇も無く、其のまゝ背嚢に
つけました

間もなく出発した時は 日は暮れかゝり
雨までしよほく降り出してゐました

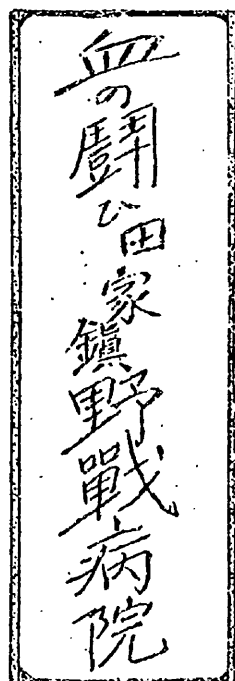
一里ばかり行った松山の中にやはり露營
でした 愈々眞の闇になり 雨は益々ひど
くなりました

こゝは松山口近くで一面高い山ばかり
人家とては附近には無いらしい 山の中に
仮設の場所を定め 天幕を草の葉に結ぶつ
け張ってみたが 暫くすると 余り傾斜が
急なため 下の方に滑つて行く 何處と言
つて傾斜の急な山の中腹のことゝて良い所

はありません

そこで夕食を食べることになりましたが
茶は魚の雑詰です ジク／＼した飯を見
ると 残して来た鶏の丸焼が目につき
あの汁の香が思ひ出される

それでもどうにか食事も終りました
時々何処かで銃声かしてゐました



第一野病

衛生軍曹 山口三月

必死の抵抗を続けてゐた松山口の頑敵も
我が勇猛果敢な攻襲に浮足たち 一歩退り

0482

200

にさがり始め 我が前線追及部隊は機を逸
せず前進を開始しました

折からの悪天候 敵の敗戦に次ぐ敗戦を
嘆くかのやうに降りしきる雨は 依然とし
て止まず 道なき山麓は泥濘と化し 私達
の歩を遅ぶのすらい通りの苦勞ではありま
せん

松山口麓 小松の麓に雨中の露營です
疲勞した身には 右左の銃砲声も耳につか
ず 何時しかまどろむ その疲顔を雨が容
赦なくうつ

一歩々々とちり／＼攻襲をつゞける歩兵
部隊の後を 降り止まぬ雨中 泥土に苦し
みつつ山麓を前進するうち 庄屋に病院開
設の命を受けました

九月十九日

直に庄屋に前進し 病院を開設 続出する
傷者の收容治療に寸暇ありません 依然

として悪天候です 我が戦闘部隊の攻襲の
手は片時もゆるまず 病室にあてられた鹿
屋は忽ち傷者で一杯になりました

苦痛を堪へて齒を食ひしはる戦友 片手
片足を失ひ生れもつかぬ不具の身になり乍
ら 尚且つ戦友の安否を気遣ふ者 又出血
多量で意識不明になつてゐても 戦闘の状
況或は戦友のことを口走る者 衛生兵を呼
ぶ兵隊 一室では治療を受け乍ら 再び前
線に復帰をせがんで軍医殿をてこずらせる
兵士 看護する私達衛生兵も涙なしには接
し得られません

戦闘は益々激しくなる 持つて居た糧秣
衛生材料は次第に缺乏する 此の時ほど心
細く思ひ 又前線からさがつて来る傷兵に
すまなく感じ 切なく思つたことはありま
せん 此の気持は 私達衛生兵でなくては
誰が理解出来ませう

FL
田
10

0483

201

二百に余る傷者に 一日二食 甚しきは
握拳大の握飯一日僅かに二箇 それすらも
充分に無く 銃砲彈の落下する附近の島の
茅を掘って與へた事も度あつたかわかり
ません

全く四面皆是敵 連絡はつかず 銃砲彈
の飛び交ふ真只中にあつて 死物狂ひの数
日間 それが實に何ヶ年もの永きに思はれ
たのであります

二十一日午後五時 遂かに飛行機の爆音
をきく 一同飛び立つ思で見つめる あゝ
友軍の輕爆機の編隊です 私達の上空に達
し やがて彈藥糧秣 衛生材料を投下し
た時の私達の心中は如何ばかり

泣き叫ぶ飢えた乳飲兒に乳房を與へられ
た時以上でした 雨霰と飛び来る銃砲彈の
中も忘れて受領に走り出しました
斯うした血のにじむ苦闘を続ける事十四

日間 目的の田家鎮要塞が占領されたのは
九月二十九日でした それが生々しく 今
でも昨日のことのやうに思ひ浮べられるの
であります

美はし主従の情愛

第一野戦

衛生軍曹 迫田千俊

田家鎮攻略戦に参加 我が病院も第一線
まで僅か三四米の地点まで進出 庄屋と云
ふ所に開設中のことであります
殺到する戦傷者を收容し 夜は自隊警戒

0484

の任に當つておました

開設の翌二十日午後二時頃入院した主従
二名の傷者がありました。それは歩兵十三
聯隊某中隊の小隊長殿とその當番兵でした。
小隊長殿の方は大した負傷ではなく、生
命に別條なかつたのであります。兵の方
は腹部貫通銃創で、とても重傷でありまし
た。

病室附人員の手不足のため、本部附人員
も一部病室援助をし、丁度私も其の病室
に居りましたので、この兩人の入院當初か
ら、他兵と共に治療看護に當つて居しまし
た。

其の兵は自分の重傷の苦痛も忘れ、一急
上官たる小隊長殿の負傷を氣遣ひ、数回床
に起きあがり、其の症状を伺ひ、輕傷なる
を知り、安心した様子で床につきました。
又小隊長殿も部下の瀕死の状態に見入り

再三慰めたり、激励したりして居られる。
そして私共に其の容態をきいては、何とか
して助ける法はないかと心配されて居まし
た。

其の主従の互に氣遣ふ美しい場面を目撃
させられ、私共一同感涙にむせびました。
暫く経つて、其の兵は又も床に起き上り
「小隊長殿、永々お世話になりました」
「お体をお大事に」

「天皇陛下萬歲」
と叫んだかと思ふと息絶えたのでありまし
た。

死に臨んで猶も上官の身を思ひ、又上官
は傷ついた身で兵を愛撫する。こゝに皇軍
連勝の眞の偉力が秘められてゐるのだと思
ひました。

あゝ
友軍機の投下だ

第二野病

衛生軍曹 池林仁太郎

九月十五日以後二週間に亘り 晝夜を分たず猛攻激戦を交へ 遂に田家鎮攻略を見事に至りました

其の間 十七日の明方から降り出した雨は却々止まず 私達の部隊も 道無き山路を又すべし賸路を難行軍をつづけました 十九日には庄屋に病院を開設し 戦傷勇士の治療に看護に努力しましたが 雨は尚も止まず 心頼みの友軍機の活躍ものぞま

れず 後方よりの連絡は切れ 第一線は全く膠着状態となり たゞ多くなすのは負傷者のみ その後送とても出来ません

二十一日 私達二平部は 約一キロ前方張風林に進出 衛生隊より患者二〇〇余名を引継ぎ 收容しました 逐次患者は多くなる一方です それにつれて 衛生材料糧秣は急速度に缺乏を告げ 最も大事な治療にも事か有様でした

四方から銃声は益々激しくなり 夜になると それが一層近くに聞える 病院の周囲には絶えず砲弾が落下する

愈々衛生材料 糧秣が無くなつたら 出来得る限りの術を盡して 最後は患者諸共と覚悟してゐましたが 神佛の御加護か 二十一日の午後には 今迄降り続いてゐた雨も止み 暗雲も霽れかけりました 午後五時頃には 待ちあぐんでおた友軍

0486

機が爆音も快く 私達の上空に飛来し
何か尋ね求める様にゲル／＼旋回しはじめ
ました

病院の皆が 軽症患者までが思はず屋外
にとび出し 気狂のやうに手を打振る

「おう 判った」と言はんばかりに 弾薬
糧秣 衛生材料と次々に投下する

感激のあまり呆然と見上げてゐた私達は
溢れ落ちる熱淚を拭ひも敢えず 材料受領
に一目散に駆け出しました

其の時の嬉しさ
受領するや意氣益々旺盛 全患者の治療
に手術に熱中しました

間もなく水路も開けたし 患者の後送が
逐次出来るやうになり 又第一線の方も

空に荒鷲部隊の協力を得て 次々に占領
二十九日午前十一時三十分には田家鎮に感
激の日章旗を見ることが出来たのであります

敵中更に惡疫に襲はる

第一野病

衛生軍曹 迫田千俊

田家鎮は武漢を守る要害の地で 敵が難
攻不落を誇り 天然の 又人工を加へた一
大要塞地帯でありまして 九月十五日以来
我が軍が二週間の間晝夜の別なく攻撃し
幾多の尊い犠牲を拂つて 遂に攻略を見た
のであります

特に當初一週間は 連日暗雲低迷し 屢
降雨あり 我が飛行機の活躍も許さず 遂
には後方との連絡はきれ 第一線では激戦

五
日
二

0487 205

甚しく 山岳地帯故意外の犠牲者が出まし
た。

私達は直に病院を開設し、統出する患者
の收容に任ずることになりました。

一線で激戦を交へてゐた將兵の負傷した
者は、空腹を感じ、輕傷者の如きは、創の
手當よりか、まづ食物をほしかる有様であ
りました。

然し其の時は既に糧食は不足を告ぐるに
至り、畑の芋を掘つたり、未熟の稻粃を鉄
兜で穀を取り、その米を患者に與へたりな
どして、言語に絶する苦難の中に任務に服
したのであります。

益々傷者は増すばかり、後送の機関はな
く、附近の家屋といふ家屋は皆病室となり
ました。

色々と手不足の点もありましたが、激戦
中の事で、それら止むを得ませんでした。

私達は若い勇士達の一命を救はんかための
重大な任務を果すべく、實に不眠不休の奮
闘をつづけました。

かゝる戦況のもとに血みどろの活動をして
おますと、二十一日に至り、天候が回復し
ました。飛行機の連絡が出来て、空から彈
藥、糧秣、藥物の補充が出来ました。

此の時の私達の喜びは、何と申しませう
か。暗黒の中に光明を得たやうでした。天
を仰いで嬉し泣きになりました。

二十四日に至り、愈々水路を尋ねく
て後送の連絡が出来ました。後送と言つても
或一つのクリューに送り着き、小さな舟で
小数の患者しか送れない。僅かづつでも後
送出来るため、幾分体に餘裕が出来る様
になった。と思ふ折、突然コレラ患者が發生
しました。

一大事とはかり、直に収容治療に當りま

ましたが、患者は数日の疲勞で体はすっかり衰弱し、病院に着いた時は既に重症で手のつけ様ありません

それに薬物は缺乏の折何とも施し様がない。コレラ患者には水分の補給が先づ何より一番の療法であります。然し使用するリッゲル氏液は僅かしかない。止むなく土民の使用してゐた釜を利用し、食塩を煮沸し、速製の「リッゲル氏液」代用をつくり患者に用ひました。其のため元氣を回復した者が多かつたのであります。天運つきでか、遂に一命を失ふに至つた者も幾人かありました。

夥しい戦傷患者、恐るべき傳染病患者、其等の治療看護に當り私達の任務も並大抵のものではありませんでした。田家鎮攻略の悲愴な一夜を私達も無事果すことが出来、恨みの田家鎮を去る私達の胸

中も亦感無量でありました

傷兵の夢

第一野病

衛生軍曹 徳増純雄

所は名高き田家鎮
時は九月の半ばすぎ、
砲煙彈雨ものかはと
壊れし民家に数多き
傷者をみとる我が部隊

早臨終と知りつゝも
声を勵まし「大丈夫」
呼べばうつゝな眼をあげて
にっこり笑ひもの言はず
かすかに「愛う」くのみ

闇に針持ち手さぐりに
心の眼をば見開きつ
一燈もろさず薬飯
看護の時を数す晝夜
我々が辛苦誰か知る

早あきらめて合点すれば
一声はつきり「萬歳」と
胸つく声の雄々しさに
涙も出でず感無量
立ち去りゆくその側を

傷つきふせる勇士等の
あり、夢いづこうは言に
「突進前進突進め」と
又は「漢口見とたり」と
大きく叫び呼吸早し



FL 田 13 (完)

0489